

393-756



1200501462609

393

756

ドクトル・オブ
フィロソフキ

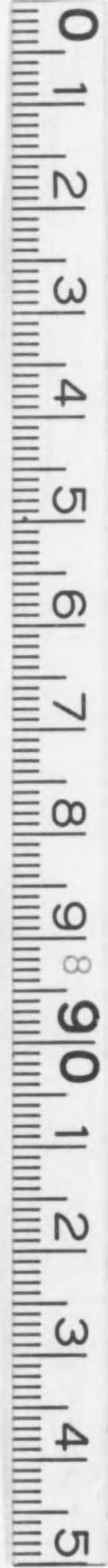
上田恭輔著

＊2

清朝時代の満洲より
現状まで

東亞研究講座
第二十三輯

東亞研究會發行



始



393

756



ドクトル・オプ
フィロソフキ

上田恭輔著

清朝時代の満洲より現状まで

東亞研究講座
第二十三輯

東亞研究會發行

393
756



78W07918

清朝時代の満洲より現状まで

ドクトルオプ
フィロソフキール
上田 恭 輔

國亡びて山河あり云々の古語があるが、亞細亞大陸に於ては亡國と共に山河また更るの例證は敢て珍らしくない。地質學上乃至考古學上から見て満洲はその顯著なるものである。現今海岸線から十哩乃至十五哩の内地に古城址の點々し、この地點より漢代の古墳群を發見する一例を見ても北は遼陽より、海城、大石橋、熊岳城なども悉くその昔は渤海の灣入した臨海都市であつたものが所謂桑田碧海の變に遭遇したことが認められる。略言すれば上代には満洲の南端即ち遼東半島沿岸の地は、遠く鴨綠江を東に越えて大同江岸の樂浪即ち今日の平壤附近までは到處に漢人種の植民地があつた様に思はれる。而て或はその數五六十萬人を降らずと想像されて居る。

爾來南滿洲は幾度となく覇主を更め、扶餘、高句麗、渤海、或は遼、金、乃至滿殊族と幾多のツ

ウングース族によつて支配されて來たが、當今南滿洲各所に於て發見される古の文化を物語る舊都の遺跡より考察すれば、本來滿洲は清朝末期の如き未開不毛の曠野でなかつたことは確實である。

往古の事跡は姑らく之を問はず、試に清朝時代の滿洲を回顧すれば、愛親覺羅氏の入關後の滿洲は全然滿洲人の滿洲であつた。清朝發祥の聖地として滿洲は漢人種に對して「禁封地」であり、同時に滿洲全土は滿洲旗人の世襲財産として絶對的に漢人種に讓與することを嚴禁してあつた。とは言へ、本來が地に親しむ農民でない滿洲人のことであり、また一には康熙、乾隆の泰平の代と共に朝廷より給與の潤澤に馴れ恰も江戸時代の旗本同様に年中ノラリクラーリと游惰に耽り、田畑は徒らに荒廢に委ねたまゝであつた。この弱點につけ込むで年々歳々山東方面の農家の壯丁が滿洲旗人所有の農地に出稼ぎに來るもの、或は支那本土で惡事を働き官憲の逮捕を脱れたるもの、中には男子功ならずんば寧ろ醜を萬世に残すを以て快事となす不心得者の一團が、窃に滿洲に潛入して各所に梁山泊生活を氣取る徒黨も次第に増加した。かくして乾隆末年に及んで滿洲の廣大なる農地の大半は殆んど山東移民の手に遷るに至つた。爰に至つて清朝政府は、滿洲に「旗東佃民」の制度を布くべく餘儀なくされたのである。

詳説すれば「旗」は滿洲旗人を指し「東」は主人または持主の義にして「佃」は小作人「民」は漢人種の總稱なり。言ひ換へれば、滿洲は滿洲旗人の所有地にして漢人種は單に之を借地して小作し得る而已との意味となる。さりながら嘉慶末年より朝廷の財政難の結果、滿洲旗人に對する扶秩は次第に減少せられ間もなく之を停止するに至つた。之よりして滿洲の大地主は皇族を初として大抵の旗人は地券を担保に漢人より借金をした。利息支拂の停滯からして、不知不識の間に滿洲耕地の實權は漢人の所有に歸してしまふた。それにも拘らず、皇室發祥の靈地なる所以と一には滿洲は滿洲人の滿洲なりとの原則に基き、滿洲全地は恰も副玉の形式の許に滿洲人の滿洲太守によつて軍政の許に統轄され、滿洲が東三省として支那の領域内に編入されても依然滿洲には軍政を布き軍律によつて統治されたのである。

初て滿洲に民政の布かれたのは、近く日露戰役後のことで、之が盛京省にのみ施行せられ、吉林黒龍兩省は清朝の末まで軍政によつて支配された。また漢人にして滿洲の主權者として榮任したのも、日露の役の結果である。即ち中華民國となつてからも「元老」取扱を受けて最近他界した名官吏で、張作霖を初て正式の官軍將校に取り立てた趙爾巽その人である。

當時趙爾巽は兵部尙書であり都察院右都御史の肩書を有ち國務大臣の位置であつたが、日本政府が滿洲に關東都督を任命するに際して、盛京將軍兼奉天總督として滿洲に赴任した。盛京將軍としては、露西亞時代の滿洲太守であつた增祺將軍の掌握した兵馬の權を踏襲し、奉天總督としては、奉天府事務大臣の官稱によつて一切の民政を掌管した。蓋し漢人にして滿洲旗人の統率する旗軍を指揮し同時に清朝の政治下に初て滿洲に民政を布きしもの趙爾巽を以て嚆矢とする。世人之を見て破格の拔擢無上の特典としたのも敢て故なきに非ずと思ふ。

その以前、日清戦役の頃の滿洲は、清朝世祖の始て定鼎せし舊都の故を以て、奉天政廳は皇室組織の形式を維持し、戸部、禮部、兵部、刑部、工部を置き、侍郎級の滿洲旗人を以て之が部長に當て北京皇室に直屬せしめた。さりながらこれ皆單に形式に止まり滿洲統治の實權は獨り盛京將軍の掌中にあつたのである。盛京將軍の地位も亦侍郎級であつたが、將軍の麾下には四人の副都統が隸屬した。

金州副都統

金州。水師營。復州。蓋平。熊岳城。五ヶ所三十九旗を統率す。

錦州副都統

錦州。義州。寧遠。廣寧。中後所。四十旗を統率す。

奉天副都統

牛莊。遼陽。開原。鐵嶺。三十二旗の外に奉天には滿、漢、蒙の混成十四旗を有す。

興 京

興京。鳳凰城。岫巖。二十四旗を統率す。

盛京將軍自身の指揮下には

盛字軍 旗兵 壹萬

奉字軍 綠兵 五千

隸屬し、甲午の役即ち日清戦争に於て、左實貴は右の奉字軍を率ゐて大島混成旅團に對抗して平壤で戦死した。その時盛字軍の主將であつた定安は、日軍に逐はれて遁走せし爲、後日罪に問はれて死を賜はり、同時に軍隊を解散して新に

八旗練軍 二千

仁字軍 五千

育字軍 五千

を編成して盛京將軍に直隸せしめた。然るに其後間もなく前記の仁字軍は北清事變の際、團匪に加

担し、奉天、營口その他に散在せし天主教會堂を焼打し、或は外國人に危害を加へたので露軍の爲に全滅せしめられた。之が爲に再び滿洲の兵制を改革し、新盛字軍五千を編成して増祺將軍の手兵とした所、露軍は之を盛京將軍の手より奪ふて巡捕隊として露軍の警察隊の補助機關とし、盛京將軍には「標隊」二百有餘名を親兵として提供した。

從來、東三省の旗軍なるものは専ら地方の安寧維持、馬賊の襲撃に備ふる爲であつて、敢て外國の精銳軍隊に拮抗し得べきものでは無かつた。首都の奉天軍隊にして既にかゝる弱兵であつたから吉林、黒龍兩省の旗軍の實力推して知るべく、有力なる馬賊には對抗出來ないほど微力なるものであつた。

かるが故に露軍の東漸と共に先づ黒龍軍は戦はずして露將の頤使する所となり、吉林省また忽ち露軍の勢力下に、彼が爲すまゝに委せた。

團匪事變を機會として、露軍は劈頭先づ前述の四副都統を廢し、齊々哈爾、吉林、奉天の三都に大使級のコミッサルを駐劄せしめ、地方駐在の露國總領事を副コミッサルに任命して事實上滿洲を行政し、營口には民政長官を置き、牛莊、海城及蓋平の三縣を支配せしめ、その上を旅順の極

東大守に統裁せしめた。かるが爲に、奉天には増祺將軍あり、地方には知府、同治、知縣ありしも支那官憲は徒に虚位を擁するに過ぎなかつたのである。

日露戦争後の趙爾巽の滿洲文治政治組織は、奉天大總督の下に三道尹を置くこととなり、南滿洲を左の三道行政区に分割した。

奉天驛巡道

東邊兵備道

鳳凰城

營口海關道

道の下には、廳。州。府。縣の四制を布き

廳は 金州。興京。鳳凰城。

州は 復州。岫巖。遼陽。

府は 錦州。新民府。海龍。昌圖。

その他の地方は悉く縣制下に置き、金州は日本の租借地條約の成立を豫期して全然一指を染めず。東邊道は専ら邊境の兵備の爲なれば、道尹には軍人を以て之に當て營口道尹は税關監督を兼任せし

めた。而て道尹は三品官。廳の長官を知府、府尹と稱して四品官、州長官たる同知は五品官、知州は府の地方長官にして六品官、縣知事即ち知縣は七品官即ち高等官しては最下級官吏であつた。

餘談ながら此機會に於て一言無かるべからざることは、我が中央政府は臺灣、朝鮮及關東洲租借地の如き漢字民族の多く居住する地方の行政官廳を監督指導すべき重大任務あるにも拘らず、右上の殖民地に施行すべき法律及び行政組織の立案を擔當せる役人達の、概して其土地の事情及文字に疎きことは、帝國の威信の爲乃至日本人の估券の爲慨歎の至である。折角「關東都督府」と言ふ堂々たる名をば「關東廳」と改稱して支那人から見れば一見郡役所以下の下級の役所の如くにして仕まひ、「滿鐵總裁」を「社長」と更め、支那では「村長」のことであることも知らず。「道長官」と言ふ立派な官名を「知事」に書き改めて、母國の官制に統一する積りならんも、實は前述の如く、知事は古來七品官の最下級の高等官のことである。支那では「局長」は一小工場主のことで「書記官」は「筆生」のことであることも知らない連中が、文字の國に施行すべき法律、官制を制定するのであるからタマらぬ。之に引かへ露國が滿洲を行政して居つた時代の官制の稱呼、役人の官名などは實に堂々たるもので確に漢民族を睥睨するの概があつた。假令ばアレキシエフは自ら「極東大守」と名乗

り、彼の役所を「將軍衙門」と呼び、民政長官邸を「巡撫衙門」と稱し、大連市役所を「總理衙門」と呼ばしめた。金州、水師營、大連、皮子窩の村役場すらも「撫民府」の看板を掲げしめ、地方の警察署にすら「廳」の字を用ひて「巡捕廳」と名づけた位である。餘は推して知るべく、この意氣の熾むなる只管敬服の外はない。勿論當今の支那の新人も日本人以上に古典を識らない者が多く、風雲に乗じて最高官府の要職に就く者も、多くは西洋育ちの洋學者で却て自國の故事故實に暗く、時には日本の法律を丸呑にして日本流の辭句熟語を採用することも珍らしくは無い。然し我々としては彼等の無學の例證を擧げて以て自らを慰むるの愚を敢てするには及ばぬ。

さて日露戰爭に就ては暫く之を不問に附し、茲には初て關東洲に民政の布かれし當時の事情を略述せんと思ふ。

時は明治三十八年の四月の初、丁度皇軍が奉天に入城して間もなき頃の出來事であつた。自分は奉天城内で日本軍の捕虜となつた英米獨その他の露軍に従軍せし觀戰武官の一團を伴ひ、御用船にて神戸に上陸し、縣廳の應接間に知事並に關係各國の領事の立會を求め、彼等外國武官に、再び露軍に従軍せないことを宣誓せしめたる後彼等の自由行動を許可し、自分は直に滿洲軍總司令部に歸

任すべく行李の準備中であつた將に再び御用船に便乗せんとする間に、兒玉總參謀長から急電を受取つた。内容は御用有之兩三日其地に滞在すべしとのことである。何の意味か推量出来兼ねたが兎に角神戸に滞留して居ると、四日目に不意に兒玉大將が現内閣總理その時の田中中佐及び現宮内次官その時の關屋臺灣總督秘書官を伴ひ神戸に到着せられ、而も大將一行の歸國は極秘とのことである。それは別問題として自分は一行に加はつて東京に歸り毎日參謀本部に勤務した。その内に突然産れ出でたるものが關東洲民政署の官制であつた。

兒玉大將の考では、關東洲租借權は戰勝國の特權として當然繼承すべきものである。爾來遼東守備軍司令部の管下にあつて軍政署の規則によつて統治されてあつた旅順、大連及び關東州は一日も速に民政に更め須らく軍人軍屬以外の一般公衆の自由渡航を許可し、平時の行政振りによつて占領地の戰時氣分を一掃せんとの計劃であつたと思ふ。

之が爲に先づ當時臺灣總督府の參事官長であつた石塚英藏氏を拉し來つて民政長官に充て、關屋事務官が中堅となり二三の人物が連日參謀本部の食堂の一室に鳩首談合の上で立案されたものが、明治三十八年の夏、勅令として公布された關東洲民政署令である。勿論當時は「民政署」を標榜せしも

の、長官始め署員一同は軍屬として任命せられ、軍服帶剣を以て制服とし、警官の如きは小銃を肩にするが如き、頗る變態のものであつたが、さりとして民政署規則は全然軍令軍律に依らないものであつた。稽ふるに當時未だ戰鬪行爲の繼續中であり、條約によつて租借權を保證されたのでもなく、殊に民政署の行政費が陸軍戰時臨時費から支給される關係上、單に一時の應急方便であり、また尤も時宜に適した名案良策であつた。

さて二十有餘年の昔とは言へ、僅に三百萬の豫算を擁しながら三百有餘名の關東洲民政署員が大連に上陸して見ると、思ひがけない色々の艱難の前途に蟠るを發見した。第一に大連自身からして民政を布くべき順序となつて居らぬ。廳舎も署員の宿泊すべき家屋すらも一切準備が出来て居らぬ。漸く「化物屋敷」と通稱された、露西亞時代に東清鐵道商業部であつた大連兒玉町にある「迷路」の如き部屋割と廊下の複雑した大建物内に署員一同は、里芋を洗ふが如くに押込められ、而して初て役所らしき新廳舎に遷つたのが明治三十八年の天長節祝日の日であつた。素よりこんなことは戰地とし忍ばざるべからざる有勝ちのことである。さりながら、民政署員が將に意氣冲天の概を以て亞細亞大陸の一端に一步を印して、立どころに直覺したこと、之を言ひ換へれば恰も四十度

近くの發熱患者が不意に頭から冷水をあびせかけられた心地のしたことは、ダルニー築港の未成品にも拘らず如何に大規模であるかを彼等が目撃した大連上陸の刹那であつた。

今日の我々の眼から見れば神戸の築港に比してダルニー港の施設などは別段驚く程度のものではない。然し當時、棧橋と言へば、木造橋の様な簡単な構造のものであるが如くに心得、四五千噸級の遠洋航路の大船を岸壁に横附するなどは思ひ及ばず、恰も占領地視察の爲に滿洲に派遣された代議士の一團が、大連埠頭に立つて「有名なダルニー港の棧橋は何處だ？」と呶鳴つたと同様に、民政署員の大部分は、幅が一町ある大棧橋に敷設する最大廣軌の鐵道の一本は略ぼ完成し、一本は半ば岸壁工事を終り、更に一本を追加する計画を見せられて、聊かアツケに取られた觀があつた。

ダルニー都市工事の如きも漸く地ならし、切り下げ土工を終つた位のもので、市中に市區計劃の木標を建つただけで、道路も無ければ家も無い、一面に黄泥の荒原であつた。とは言へ露西亞のダルニー市建設のプランを見ると小規模ながら、巴里の凱旋門を中心とした新市街の形式を採り、中央廣場よりエトワル形の街路を放射し、要路は二十間乃至三十間幅のアスファルト道路にすることになつてあり殊に中央廣場には、市廳、オペラ、ブルース、銀行など美觀を主とした宏大なる造營物

を羅列する設計である。これなども現今我が東京の丸の内を見慣れて居る者には毫も奇異とするに足らないのであるが、二十五年前の島國民族には何もかも想像以外のものばかりで、萬事萬端悉く露西亞人のやる仕事は日本とはケタが違ふて居つたから、此點を尤も痛切に知覺したものは關東州民政署員であつた。

之を詳説すれば、彼等は、日本開闢以來初めて世界大陸に於ての都市建設の大任を帯びて居る。先頃までは恰も世界の盟主であるかの如き態度を以て、廣大無邊のヒンターランドを有つ北支那唯一の不凍港に副はしき臨海都市としてロマノフ帝國があらゆる智囊を絞つて計劃したダルニー市を承け繼いで之を經營せなければならぬ大責任を負はされたものである。僅々年額三百萬の豫算を擁して何等氣のキイタ仕事の出來さうにも無いこと、恐らくは關東廳管内の治安維持の警察費にも足りないことを承知して居るのであるから、大連市を如何に建設すべきかだけでも容易ならぬ難問題であつた。當時の民政署員は學校出の若手のチャキ／＼のみであつたから、彼等の意見では、大連市の經營丈は如何にしても露西亞の施設計劃以下のものに爲すわけにはゆかぬ。若し之を日本流に經營して、釜山及仁川の日本町同様のものを建設すれば、戰敗國の露西亞に對して屈辱であり、世

界列強には外聞を損じ、第一支那人から全く馬鹿にされること燎然であると主張した。然るに當時政府要路の大官連は、皇國の興廢を堵した開國未曾有の大戦争の後である。假令戦勝したものの國帑を殆んど蕩盡し尙巨億の外債までも背負ひ込むだ際である。日本の帝都にすら廿四間は愚ろか二十間道路すらないではないか。それが海外の而も猫額大の關東洲で三十間道路などとは思ひもよらぬこと、露西亞の計劃の大連の陸橋（現在の日本橋）なども三十間幅などとは實際に馬鹿げて居る。九間幅で澤山である。云々の意見であつた。これまた邪論では無いが、然し民政署の若手達も容易に之に屈服せぬ。その板挾となつて大に當惑したのが石塚民政長官であつた。その一例として前記の日本橋の如きも豫算の都合上、双方の額を立て、日本の國旗の下に日本人の建設した最初の鐵筋コンクリートの橋梁であつたが惜い哉、これが十二間になつて居る。之が爲に現在は電車は單線運行であり、自動車は年々急速の勢を以て激増する爲、もはや交通の安全を保持することが不可能となつて、大連驛も彼岸の空地の不十分な、尤も繁華な方面に移轉せなければならぬ必要に逼られて來た。

右の如き事情の爲に大連市の經營の方針すら何等具體的名案も出ず有耶無耶の裡に明治三十八年

は過ぎてしまふた。幸にして平素若手の意見に同情を表し、先見の明に於て群を抜いて居られた、故兒玉源太郎伯及び辻村主計總監の直接間接の斡旋の許に翌年春、彌よ大連市は露國のダルニー設計プランを採用することに廟議一決し、畏くも明治聖帝の御裁可を賜るに至つた。事爰に至つて全く進退谷つたものは老人組では無く却て民政署の若手組であつたから不思議である。蓋し當時の關東洲の地方情況を一瞥するに、明治三十八年九月末の調査によれば、關東洲の全人口は内外人を總括して、三十六萬九千七百二十六人しかない。その内日本人は軍人軍屬を除いて僅に五千〇二十五人であり、その中の三千六百五十六人は大連市内のバラツクの一廓に密集し、而も大半は婦人である。再説すれば戦時中に滿洲に渡航した邦人は大抵一攫千金の冒險の徒と娘子軍である。在住の支那人を見れば苦力と水飲百姓のみで、未だ一軒の商店も無ければ、工場らしき工場は一ツも無い。この情況の許に大連民政署が市の地區割をして、現今では借地権が一坪何百圓もする商業地域内の一等官有地を坪十錢で貸下げようとしても誰も借手が無い有様である。當時未だ滿洲大豆の海外輸出は夢にも想像せなかつた時代であり、豆糟は日本に輸出しても豆油の處分に困ると稱して日本人で油房工業に手を出す者が無い。先づ何れの方面を見ても地方の財源たるべき事業が何一ツ見當らぬ。從

つて民政署の地方税に就ても確實なる成算が立たぬ。民政長官を始め責任當局が擬議を重ね、あらゆる智恵を絞つて考へついた事は、僅少の生産費で關東洲内で殆んど無盡蔵に製造される天日鹽を東三省官憲に格安に賣つける案であつた。その頃の奉天官府の鹽務司であつた陸宗輿氏に交渉すると、鹽は中國開關以來政府の專賣物であるから、外國製品を買入れるわけにはゆかぬと斷はられたが、所謂樽俎接衝の上支那の領土内の製品の故を以て、先づ一年九萬斤だけ買入れ様と言ふことになつた。併し民政署としては年産額一億斤の製鹽によつて地方収入の道を立てんとするのであるから九萬斤位では何のタシにもならぬ。重ねて交渉を続け漸く三十萬斤位で話の纏らんとする段取となつて突然陸宗輿氏は北京に榮轉して、話は頓挫した。さらば母國に輸送せんとすれば、大藏省が鹽の專賣法を布き關東洲鹽は外鹽取扱を受け一定輸入額を規定し更に輸入税を課することになる。かくして民政署の財政方針は悉く齟齬した。せめて社會施設と慈善事業の資金を得んが爲に「富藏」を支那人公議會をして經營させると此度は外務省から抗議を受けて之を停止せなければならぬ始末となり更に阿片總局と呼ぶ半官半民の一機關を設立して、阿片中毒者に吸煙を許可する制度を採用した處、相當の賣上はあつたがウマイ汁は販賣下請人に吸ひ取られて民政署の収入は割合に多くな

い。かくの如く計劃は悉く蹉跌し民政署の地方収入は、藝娼妓税が多額を占むるが如き哀れな状態であり、ダルニー設計の如きも未だ一指を染むるに至らずして明治三十九年も過ぎ去り、モスコイ街即ち現在の山縣通には一軒の人家も現出せず、中央廣場ですら依然として雜草生ひ茂る野原であつた。

さらば其頃の關東洲以外の滿洲は如何にと窺へば、戦後とは言へその頃の滿洲は世界とは何等の連絡を有たず、世人には未知の國であり、支那本土にすら滿洲の名は識られず、東三省の稱呼を識る讀書人にすら、滿洲は人參、煙草、藥草の産地で馬賊の巢窟、猛獸の徘徊する土地位の考しかなかつた。實際、盛京、吉林、黒龍の三省を總括して人口漸く一千万、遼東半島を除けば殆んど未開の地、道路も無ければ橋梁も存在せず、一本の縦斷鐵道はあつても此は軍用線であり、地方の交通産業とは没交渉であつた。農産物の如きも主として遼河の民船の便を藉り、大豆は鐵嶺の馬峰口からジャンクに積んで營口に出した。その産額の如きも今日に比すればお話にならぬほど少量のものであつた。當今滿鐵の第二の財源である撫順炭鑛の如きは全く手がついて居らず、煙臺炭坑の如きも一日二百噸足らずの出炭程度でこれも附近の飲食店乃至鍛冶屋で消費されるのみ。要するに全滿

洲を通じて未だ目ぼしき産物は現はれて居らず、従つて滿洲唯一の貿易港であつた營口を通じての東三省の貿易は輸出入を合計して年額五千萬を内外して居る程度であつた。而もこの貿易より生ずる収入は營口の露國民政廳の手を経て地方行政費に消費支辨することになつてあつた。

その滿洲の十四年後の今日は如何に？ 人口は將に三千萬に垂んとし、昨今毎年百萬近くの支那本土からの家族的移民を迎へる。既墾地は一千五百萬町歩と稱せられ、これより産出する農産物の年額大約十五億圓と算せられ、その主要特産物たる大豆の如きは、滿鐵農事試験所の努力に依る改良種子の分布によつて品質の改善と共に産額も三倍した。従來は専ら食料に供された三百有餘萬の羊も、滿鐵農事試験所の實驗によつて食料と同時に、やがて滿洲はメリノ羊毛の供給地たらんとするプロペクトがある。その以前は殆んど耕作不可能視された水田の如きも當今既に二百萬石の上米を收穫し尙も年々水田は増加してゆく。四十二億何千萬石の立木を誇る森林地帯よりは年額一千萬圓の採木がある。就中先も顯著なる大發展を遂げた地方産業としては撫順炭鑛と鞍山の製鐵事業を指摘せねばならぬ。

露西亞時代には殆んど手をつけず僅に鐵道支線を敷設して、千金寨に二百萬坪の鐵道用地を有つ

て居つただけの撫順は、滿鐵が爾來一億何千萬の巨資を投入して施設經營し、世界無比の「露天堀」探炭法を實行せし以來、現今は一日四萬噸の出炭と共に東西十哩に亘つて電車の四通八達する滿洲屈指の文化都市を現出し、炭鑛によつて生計して居る支那人が十數萬人と稱せられる。若しそれ鞍山製鐵所の如きに至つては、言はゞ金の力と人の力で瓢箪から駒を出したものである。併し一億三千萬の途方もない大資金を投下して滿鐵は損失を續けて居る。然しこの大資金の恩恵に均霑した者は誰かと言へば則ち土地の住民と地主である。

さりながら、徐ろに今日の滿洲の繁榮を齎したる主なる原因を討究すれば、先づ指を油房工業に屈せざるを得ないと思ふ。現今南北滿洲を通じて豆糟製造は大小を合計して何千何百あるか判らぬ。大連だけで七八十ヶ所の油房工場があり、一年に消費する大豆の數量は大約百萬噸、それから約三千萬枚の豆糟と十萬噸近き油を製産する。營口では四百萬枚の豆糟と一萬四千噸位の豆油を絞る。安東はやがて營口の倍額を産出するだけの勢力を示して居る。その他各地各村に散在する小規模油房の産額を總計すれば、近年滿洲の豆糟及豆油の年産額は實に驚くべき巨額のものであらねばならぬ。

豆糟工業に次で近年滿洲に勃興した大工業は柞蠶製絲工場と棉花紡績事業である。一朝内亂鎮靜南北統一、中華民國に堅實正統の中央政府の確立した曉には益滿洲をして偉大ならしむるの、これらの大規模の工業であると思ふ。兎に角今を去る二十五年前僅に年額五千萬圓を計上せし東三省の貿易を幾んど二十倍即ち十億と言ふ驚くべき數字を羅列するに至らしめたのは、蓋し何者の力であるかを考慮して見たい。

昭和元年十二月末調査として大藏省の報告によれば、去る明治四十年以降、日本人の滿洲に投資した事業費は十四億〇二百〇三萬四千六百八十五圓也である。その内譯を覗へば

個人企業 九千五百萬

法人企業 四億四千萬

殘餘の九億は滿鐵の投資になつて居る。此資金に對して滿鐵は一年に大約二億の收入を擧げて居るとは言へ、純益中より株主に一割の配當を爲すの外は、殆んど滿洲のあらゆる事業に投下して居る。また滿鐵は毎年新事業費として約三千五百萬圓を計上するが、この總額の三分の一は勞賃として土地に落す金である。加之平素「滿蒙開發」「日支共榮共存」を標榜して居る丈に、所謂文化事

業として主として教育衛生方面に向つて毎年一千二三百萬圓を支出する。鐵道沿線到處に母國では見られない立派な病院並に各階級の學校が設立されて、之れが一般の滿洲在住民に共通的に公開してゐる。尙滿鐵以外に大藏省の調査に漏れて居る個人乃至合資事業も澤山ある。併一般に日本人の滿蒙に投入せし資金は先づ二十億と見られて居るにも拘らず、實情に於ては南滿洲鐵道會社の鐵道運輸營業以外は殆んどゼロである。投入した資金の關係上、門戸を張つて居るものゝ毫も利益を擧げ得ないのみならず、資金の回收の絶望的のものが多々ある。若しそれ個人としての在滿邦人に至つては官吏か滿鐵所員以外には發展の前途を認め得ないものが尠くない。之に反して土着の支那人は如何と言へば、二十年前、半土窟生活をして漸く一家の糊口を凌ぎ得る程度の耕作を營むで居た農家は、爾來三回も住宅の建築を更めて現今は石造乃至煉瓦造となり歐羅巴の田舎でも見られない様な立派な村落に建て直つて居る。以前は高粱ともやしの鹽煮で舌鼓をうつたお百姓も當今は小麦のパン、豚饅頭、時には米の飯を食ふ様になり、年中乞食同様の粗末な綿服を身に纏ふて居つた農家の婦女子も近年、正月、端午、仲秋などには、絹の着物に蝙蝠傘をさす様になつた。その昔は單に自家用の食糧を耕作したものが現今は輸出商に賣らんが爲の大量農業を營み而も市價が約三倍して

も生産費は依然として二十年前と大差がないのであるから、勢ひ彼等の生計に餘裕を生じ著しく金持になる。我々の言ふ意味の金持とは違つて事實の金持である。銀行などにはメツタに預けない、家内の何處かに死蔵するのであるからタマラぬ。日本人の投下した資金の何分の一かゞ必ず滿洲の地中に埋藏されてある。更に滿洲都市の變遷を鑑みれば、農家以上に驚くべき發達が認められる。

その昔は、奉天城内と雖も道路らしき道路は「井」形に四條しかなく、これとても狹隘な藥研形に中央部の凹むだ泥路のみで、雨でも降れば忽ち川に變じて交通遮断となる。官衙と雖も軒は傾き藁の間から尺餘の雜草の繁茂して居つた位であつたから、一般民家の如何に貧弱であつたかが略ぼ想像されると思ふ。實際は殆んど人力車も通じなかつたのである。その後幾度となく市區改正が斷行せられ、道路はスチームローラーで固めた割栗のマガダマイズとなり、電車は運行し、街路に面した商店は大抵半歐風に改築せられ、最近堂々たる百貨店ビルディングが續々新築される。奉天以外の都市もまた同一の歩調を以て急速の發展を示し、就中その顯著なるものは安東の舊市街と哈爾濱の傅家甸である。僅に十四五年前乞食町の如く不潔極る傳染病の巢窟であつた貧民部落が、今日は殷賑繁榮肩摩穀擊の文化都市と化し、洋風の大夏高樓が全市に軒を並べて居る。

惟ふに滿洲土着民の社會は四階を通じてその富、日露戰役當時に比べて幾んど二十倍して居ると思ふ。過去數年間張作霖の戰費を賄ひ得ただけ彼等の懐に餘裕のあることを物語つて居る。而して個人にして成功したものは算へきれないほどザラにある。百萬長者は到處に出來た。日露戰役當時、人夫の下請をして居つた男で一千萬以上の身上を造つた成金もある。

さらば今日北米合衆國を除くの外、全世界は殆んど皆不況のドン底に呻吟しつゝある中で、如何にして獨り滿洲のみが前述の如き幸運に恵まれつゝあるかを討札すれば、主なる原因は二十億と言ふ法外なる日本人の投資である。また一には過去二十年間滿洲は五風十雨順調の天恵があつた。さりながら第二の主因は支那四百餘州中東三省のみが最近の戰禍の厄を脱れたことである。而て吾人は一體何によつて獨り滿洲のみが、彼の慘憺なる南北衝突の内亂の渦中から脱し得たかを尋ねて見たいのである。それだけは誰が何と言ふとも、全く日本の駐劄師團と鐵道守備隊と關東廳の警察と憲兵の間接直接の御蔭であることを公言しても憚る處は無い。支那人が之を認むると認めないと、之を感じると感ぜないと、之を悦ぶと悦ばないと別物である。

その問題は別として、爾來土着の滿洲人は右上例記の如き支那本土の民と比べものにならない幸

運に浴して居るにも拘らず、投資者であり、滿洲特産物の買主であり、滿蒙開發に資すべき新智識と新機械の提供者であり、あらゆる技術工藝の教授者である在滿邦人が何故にタイした成功もせず年中泣言を並べ、事變の發生毎に必ず中央に代表を派遣して自家の如何に意氣地無きかを吹聴せしむるが如き可憐の境遇に在るかを考へて見たい。此點に就ては母國識者間には夙に定論がある様ではあるが、自分の如く過去二十四年間滿洲の變遷を體驗した者から見れば、在滿邦人の不成功は必ずしも不勉強と奮發心の缺乏、獨立獨歩の精神に乏しく専ら官憲や資本團に依頼するが爲のみでもない。要するに、滿洲と言はず、朝鮮と言はず乃至臺灣と言はず、海外植民地に於ける邦人の大發展を遂げ得られないのは之を二ツの原因に歸さねばならぬと思ふ。

一には 母國の同胞が海外植民地の實情に無理解であり従つて後援の意志存在せぬこと

一には 政府自身が植民地に對して今に至つて尙無方針であること

である。滿洲が何の方角にあり、ドンな寒暑の氣候であり、在住邦人が如何なる民族と對抗せねばならぬかに就て多少の理解力のあるものは、八千萬の同胞の恐らく十分の一にも足らぬかも知れぬ。何程か滿洲の事情を聞知した者でも、馬賊と南京虫の横行する危險地帯の如くに心得るものも

敢て珍らしく無い。

政府の對滿政策に至つては二十有餘年後の今日尙一定の方針が無い。時には商租權の獲得の爲には、對等條約も敢て厭はず、滿鐵附屬地の行政權も讓歩して可なりとの意向を暗示するかと思へば、忽ち滿蒙特權の絶對的擁護の爲には所謂積極政策斷行の威勢を示さんとする。略言すれば内閣の更迭毎に標榜が更まる。而て不相變三頭政治乃至四頭政治を云々して居る。試に眼を轉じて太平洋の彼岸を視よ。今年は恰もカナダ太平洋鐵道會社の創立開業四十五周年に當る。而て此間總裁の更迭を見たこと僅に四回、これも死去と榮轉の爲である。此程四十五周年記念祝賀式を舉行され、その際創業當初からの勤続社員を表彰したが、表彰されたものゝ存外多數であつたのみならず、其の大部分は社内的重要椅子を占むる老紳士であつた。これでこそ所謂「百年の計劃」が遂行され、十年計畫も二十年計畫も實施され得るのである。英國の世界的植民政策の成功の秘訣も蓋し此消息によつて推して知るべきである。

之を要するに、露西亞の東方政策は、帝政時代も今日の勞農政府となつても依然として動かない。米國の滿洲門戸開放主義と錦愛鐵道問題は手を代へ品を代へて終始現はれて來る。

英國としては出来得る機会に於て露西亞とアメリカの眼を滿洲方面に轉回せしめんと努力する。滿洲自身も排日の爲とあらば青天白日旗の掲揚も敢て辭せず、三民主義者も日本に對抗する爲ならば張作霖の一族と雖も喜んで手を握る。排日目的の運動ならば支那全土が一致共同する時勢となつて來た。徒らに虚勢を張る秋ではない。寧ろ近年續出の不幸に就ては中國四億の隣人に深厚の同情を表し、張、吳兩滿洲主權者の横死に對しても須らく日本國民として哀悼の誠意を披瀝し其他萬事に對しても互に胸襟を啓いて意志の疏通を計り、相互の利害得失を考慮して以て共存の道を謀らねばなるまい。とは言へ、一朝事あるに際しては在滿邦人の生命財産の保護と二十億の投資に係かる事業の擁護と、殊に天下の公道たる交通機關の經營の重任を負へる滿鐵の保安の爲に日本帝國としては之に對する自衛權を斷行するに毫も躊躇せざる覺悟あることは勿論の事である。(了)

国立国会図書館

昭和三年十月四日印刷
昭和三年十月七日發行

東亞研究講座第二十三輯

『清朝時代の滿洲より現狀まで』

編輯者 磯部 榮一
東京府西巢鴨町池袋千二百五十八番地

印刷者 高山 恒三
東京市芝區南佐久間町一丁目一番地

印刷所 商務印刷所
東京府西巢鴨町池袋千二百五十八番地

發行所 東亞研究會
(振替口座東京五八九二九番)

複製轉載を禁ず

終

